

講 演

“木離れ”する子供達

—木の教育現場から—(下)

北海道教育大学教授 金田 弘

日本の「木材加工」教育

“木離れ”をしている子供達の実情をこのように、紹介してきたわけですが、わが国は「木の文化」を長年継承してきた国であります。つい先だっての新聞にも、1万5～6千年前の遺跡の中から木の柱が出土したという記事が出ておりました。そのような文化を維持発展させて行くには、小学校や中学校で、それなりの教育を続けて行く必要があろうかと思います。しかし、残念ながら、教育の実践に、どうしても知育偏重の傾向が出てきます。この弊害も、随分前からいわれていることですが、なかなか改善はされません。

木材を加工する教育というのは、頭脳と手先とを両方使うわけであり、ひとつには、理論学習、もうひとつは製作の学習ができる。つまり、バランスのとれた、人間の教育ができるのではないか、と考えております。ところが、時代が進めば進むほど、こういうことが疎かにされて行く傾向があるわけとして、この流れをどこかで堰き止めて置かなければならぬと考えております。

それで、少し古いところを調べてみると、日本の建築技術が、木を中心に発展してきたということが大きな理由になるとは思いますが、明治時代に高等小学校の教育に、手工教育が導入された、というのが、この種の教育のスタートであります。

それは明治19年のことであります。この年に初めて高等小学校に手工科という科目が創設され、その手工科の教育の中心が木材加工だったわけであります。その流れが続いてきまして、戦後になんでも、小学校では、図画工作、その中で木工作というのが、ひとつの位置付けを持ち続けております。

また戦後、新制中学校が発足した時には、職業科という科目が開設され、その中で木材加工という教育が行われてきたわけであります。そして、その職業科が

昭和33年に技術家庭科となりましたが、その中でも木材加工というのは、ひとつの領域として、重要な位置づけられ、現在に至っているのであります。このように考えますと、日本の教育の中では、木材加工という分野がかなり大事に扱われてきていることは確かです。

しかし、残念ながら、戦後50年も経ちますと、生活様式がすっかり変わってきまして、残念ながら、子供達は“木離れ”的な真っ只中にいるということあります。

例えば、中学校で、それはどの教科も同じですが、「どのようなことがらを、どのように教えるか」という指針があります。これは、国語もそうですし、数学、英語、理科、いずれも同じです。これは文部省が決めている「学習指導要領」という、学校の先生方の教育の拠り所になるものであります。そこで、この、文部省で決めていた中学校の技術課程の中の一領域である、木材加工の「学習指導要領」とは一体どんなものかということをちょっと紹介してみたいと思います。

この「学習指導要領」というのは、時々変更になるわけですが、一番新しいものは平成5年に改訂になったものであります。この年までの指導要領は二つの課程に分かれておりましたが、平成5年度になりまして、新しい指導要領ができ上りますと、この枠が消えて、もっと簡単になりました。これは何故かと申しますと、平成5年度の改訂に伴い、中学校の木材加工の学習が、男女共修になったからであります。それまでは、木材加工は男子生徒が勉強するもので、女子生徒は学習しなかったのですが、この改訂によって、男女共修に変わりました。そして、1年次に木材加工は男女共に必修科目になったのであります。

中学校の「技術と家庭」という教科の中には、例えば「家庭」ですと、食物、衣服。「技術」ですと、木材加工の他に、電気、機械、金属加工等、その全部で

11科目になります。11科目の中で3～4科目のみが必修になり、木材加工は、1年次で男女が共修で必修ということになったわけあります。

この改定で、学習指導要領の内容は、少し簡素化されました。その内容は誠に簡単なことでして、わずか5行であります。「簡単な木製品の設計と製作を通じて、木材の特徴と加工法との関係について理解させ、使用目的や使用条件に即して製作品をまとめる能力を養う。」これだけであります。これが、中学校で指導をなさる先生方の基本となるものであります。

これをどのように解釈するか。ある先生方は、これをビシッと大事なものとして捉え、これから外れることは絶対にしない。「それは学習指導要領には無い」と、非常にリジッドに考えている方々もおります。「これは単なるひとつの指針だから、参考にはするが、もう少し自由裁量で何かやってみたい」という先生方もいます。

1年次に必修になったということは、私たちの立場からいいますと、大変有り難いことなのですが、その実情はと申しますと、1年次に技術家庭の時間が70時間あるわけでありますが、家庭科が半分を占めますから、技術科には35時間が与えられるだけであります。

それではその35時間で、1年次で、中学校できちんと領域に定められた木材加工がどんな中身で学習されているかということで、ある教科書の木材加工編の目次を紹介してみます。

1番初めに「木材とわたしたちの生活」、2番目に「木材の特徴と性質」、3番目に「設計」、4番目に「製作」、5番目に「木材資源の利用と役割」。これで、“木離れ”した子供たちを、なんとか、木の方へ引き戻したいと思っているわけですが、時間はわずか35時間しかないのであります。これをどういうふうに考えれば良いのでしょうか。他の必修になっていない課目からいたしますと、必修ということは非常に大きなことです。確かにそうなのですが、理論学習と製作学習、頭脳と手足を使って教育をするということが、非常に大事なことだとは申しましたが、残念ながら実情はこの程度のことであります。

“木離れ”から引き戻すために

こういう状況の中で、「どのように“木離れ”的な子供達を、『木の素晴らしい世界』に引き込んで行くか」ということが、これからの課題になるわけ

であります。そこで、指導する側のお話をすこしいたしますと、小学校でも高学年になりますと、図画工作中で、「木工作」という分野が出てきます。これも小学校の「学習指導要領」には、図画と工作が半々に取り決められているわけでありますが、これも小学校に行って色々調べてみると、大部分の時間は絵を描くことに費やされているというのが現実であります。

一番最初に申しましたように、工作という言葉がどうやら、死語になりかかっている現実の中で、(工作も、木工作ばかりではないのですが)小学校でもう少し、木工作をして欲しいものと思っております。そして、その上で中学校で更に学習できれば、と思うわけであります。残念ながら小学校では、ほとんど木工作が行われておりません。最大公約数的なことを申しますと、こんな現状であります。



教材作品 4
積層したスギ辺・心材から採った小片を組み合わせた小箱(2)

そして、その原因は何かと申しますと、先生方に伺ってみると、「材料の入手が困難」、「工具がそろわない」、「時間がかかり過ぎる」、「経費がかかる」、「刃物を扱う時に全員に目が届かない」、そして、いいたくないのですが、「教師の側に教えるだけの技術がない」であります。

キット教材

残念ながら、小学校の実情というのはそんな所にあるわけであります。そういう教育を受けた小学生が、

中学校に上がってきます。そこで35時間の必修の木材加工の学習が始まるのですが、35時間で、この教材書の1番から5番まで、全部やるというのもなかなか大変な事であります。こういった条件の下ですが、ただ理論学習で、「木材の特徴と性質」だけというわけには行きません。その中で、色々な工具などを使って、実用的なもので、家に持つて帰ると、お母さんが褒めてくれる、家庭で使えるような、「モノ作り」もしてもらわなければならぬわけです。そこで出てくるのは、「キット教材」であります。

木材材料を使って、これを加工して、何か製品に仕上げようと考えますと、「どういう材料を使って」、「樹種は何で」、「寸法はどれぐらいにして」、「繊維方向はどうとて」、「塗装は何を使って」、「接合方法はどうやって」……、これが学習の基本だとは思いますが、それらを省略して、教材屋さんからセットを買って、それで製作学習をするというやり方が屢々行われているわけであります。確かに中学校のサイドからいたしますと、やむを得ない点もあるのですが、どうやらこれが「関心の無さ」の原因ではないかと、私は考えるのであります。

「個性化の時代」というのがひとつのキーワードになってきている時代の教育の中で、1クラス40人いましたら、やることが全部一緒ということは、生徒たちにとっては、非常に面白くない事であります。A君も、B君も、C君も、使う材料は全部スギ。寸法は全部一緒。でき上がってくるものは全部一緒。加工法も、塗装も全部一緒。A君とB君とC君の作品はどこが違うか、「A君のは材料にちょっと節があった、僕のにはなかった」。せいぜいそんなことで終わってしまいます。これではせっかく、樹種がたくさんあって、それぞれの樹種特性もそれぞれ違うという、こんな素晴らしい木質材料を使って、学習するわけですから、できれば、「僕はスギを使った、君は……を使った」という、違いがないと「個性を重視した教育」というものにつながって行かないのではないかでしょか。木材加工の学習がプラモデルと何も違わないということになりますかねないのであります。

こういうお話をいたしますと、現場の先生方からは、「そういうわれましても、時間もありませんし……」という声が聞こえてくるわけですが、そこに何らの配慮があつても然るべきだと考えております。その配慮とは何かといいますと、キット教材を使うのはいたし方

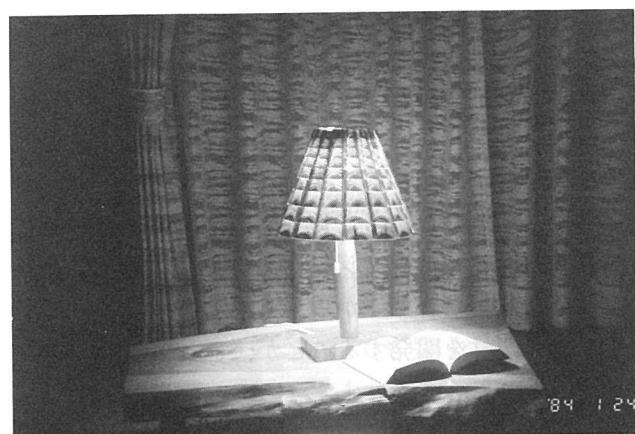
ないとして、そこに何んらかの工夫を加えて欲しいということであります。

つまり、セミキットという、ベースはキット教材であつても、少し選択の余地を残し、樹種も2~3種類。加工法としても、釘を打つてもいいし、接着剤で接着してもよい。接合金具を使ってもいい。塗装は塗料の種類は2~3種類ある。そんなような何か、ちょっとした工夫が、生徒たちの関心をつけて行くことになるのではないか。そんなふうに考えているわけであります。キット材料の悪口ばかりいうわけではありませんが、「ただそれだけ」ということは排除して行かなければならぬのではないかでしょか。

まず「関心」を

私の大学は教育学部でありますと、ほとんどの学生が、小学校、中学校、あるいは養護学校の教師になりますので、教室の学生、とくに木材加工を専攻する学生たちには、日頃色々なことを要求しているわけであります。

それで、一番大事なことは、小学生、中学生に、木に対する「関心」を持ってもらうということと同時に、



教材作品 5
スギ木口薄片をかさに利用した照明器具(1)

将来教育の任に当たる大学生たちに、できるだけ樹木や森林に、木材材料、その加工、それででき上がる製品、そういった方面に、まず「関心」を持ってもらう。「関心」を持ってもらいますと、次に「興味」が湧いてきます。「興味」が湧いてきますと、そこから色々な「工夫」が生まれてきます。大学生をみておりますと、そのようなプロセスを通るようです。

私の教室の学生たちも、入ってきた時は、ライラッ

クにもナナカマドにも、全く関心が無く、材料をみせますと殆ど「ラワンだ」と答えていた学生たちですが、3年生、4年生で色々な体験を積んで、「関心」や「興味」が出てきますと、「大学院に行って、もう少し勉強をしたい」という学生も出でます。大学生といえども、大事なことは、まず「関心」を持つということです。 「関心」を持てばそれが「興味」につながり、「興味」が出てくると、そこに「工夫」が生まれてきます。それが今、教育の面で「個性化」とともに求められている、「創造性」、「独創性」といったことにつながって行くものだと思っております。

教育の題材と教材

色々とお話ししてきましたが、「木材加工」の教育を小学校でも、中学校でも、実践する場合、何が一番大事な点かということを、ひとつを挙げるとしますと、「どんな題材や教材で教育するか」ということになります。私は自分のところの学生に、色々なことを、やってもらいますが、今まで、接してきた学生たちをみて思うことは、「学生が興味を持たない題材は、まずうまく行かない」ということです。そういう題材は小学校に持って行きましても、中学校に持って行きましても、うまく行きません。

最初は全く関心を持っていなかった、学生たちが「こんなに面白いのか、こんな工夫をしたら、こんなふうになるのか」といったことで、一生懸命、取り組むような題材が開発されると、大体それは、小学校や中学校に、そのままストレートには行かない場合でも、もうちょっとアレンジを加えますと、導入ができるようになります。ですから、まず学生諸君が興味や関心を持つ題材を開発することが、ひとつのポイントではないかと思っております。

そんなことで、私の研究室で、この何年間か、色々と開発してきた教材がいくつかありますので、その中で学生たちに人気の高かった題材を少し選んでスライドにして、用意をしてきましたので、のちほどおみせしたいと思います。

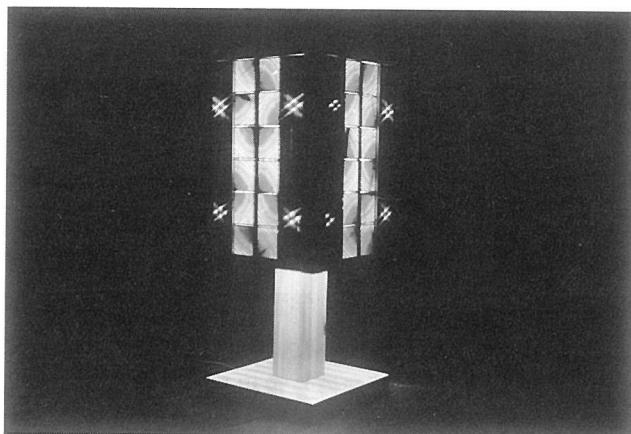
「特効薬」はない

最後になりましたが、このように、私は木材教育を小学校、中学校で行うことを生業と思ってやってきましたが、特効薬といえるものは今のところ、何一つとしてみつかりません。時間や施設も限られた条件の中

で、 “木離れ” した子供たちをどうやって木に引き戻すか、残念ながら、いくら考えましても、特効薬はひとつも頭に浮かんでこないのであります。

しかし、やることはいくつかあります。まず「教育学部の、木材加工の、担当者、研究者が、色々工夫をすること」、これは当たり前のことであります。それから、「小学校、中学校の先生方と、上手にコンタクトをとって、研究の結果を現場で試してもらうこと」。これも大事なことであります。これまでに研究室でやりましたものを、小学校や中学校に持つて行きまして、色々と実践させて頂いたこともありますし、われわれの研究室で、開発した、題材や教材を、発表会のようなことをやって、色々な方々にみて頂いて、批判を仰いだりもいたしました。色々と試行錯誤を数年前から続いているところであります。

さて、これからは、皆様方へのお願いになるわけであります、「学校教育を補うものの存在」ということを、ひとつ考えさせて頂きたいのであります。そのひとつの例が、こちらの林産試験場が毎年行なっておられる、「木工コンクール」であります。我々の立場からいたしますと、これは本当にありがたいことでございます。こういうことが、生徒たちの「関心を引く」わけであります。その「関心」が「興味」に育って行くのであります。



教材作品 6
スギ木口薄片をかさに利用した照明器具(2)

そういうことを考えますと、その地域ごとに色々、特長があります。林業地帯、木材加工の盛んな地域…。そういう地域性と学校教育がうまくタイアップすることを考えてみてはどうでしょうか、これも一朝一夕にできることではありませんが、例えば、皆様の施設を

見学させて頂くことから始めて良いと思います。もっと進んで、施設をちょっと使わせて頂くこと。これは、両方が負担になることは確実ではありますが、そこを乗り越えるということがひとつ必要なではないでしょうか、と思うわけであります。あるいは参考館や資料館などがありましたら、そんな所を利用させて頂くというのも非常に良いことだと思います。あるいは、小学生や中学生に、機会がございましたら、「素晴らしい木の世界」のことを、今日お集まりの皆様方にお話しして頂けたら、と思っております。

あるいは、営林局や営林署などがある地域ならば、そこと学校とタイアップしてやれることが何かあるだ

ろうと思います。今、道有林管理センターでは「トンカチ教室」といった催しをやっておりますが、これは大変良いことをやって頂いてるわけであります。あるいは、営林局や営林署の管轄かと思いますが、実験林や見本林などの施設を利用して頂いて、子供達に樹木実習などさせて頂きますと、そこから、何か「関心」が湧き上がってくるのではないか、そんなふうに思っております。それから、伝統工芸、地場産業で木材を盛んに利用している地域ならば、そういう所と教育をうまくタイアップできないものでしょうか、これは、今日お集まりの皆様方に、私からの心からのお願いです。

『頑張ってますシリーズ』 原稿募集

ウッディエイジでは、『頑張ってますシリーズ』を掲載しております。『頑張ってますシリーズ』は、会員の方々のページです。「会社・工場自己紹介」、「製品の紹介」、「木材業界に対する提言」など、何でも結構です。お気楽に応募してください。いつでも受け付けています。応募要領の詳細については、当協会にお問い合わせください。